

同一視と共感との関連性

Relationship between Identification and Empathy

登張真稲*

Maine TOBARI

要旨：同一視と共感に関する文献をレビューし、同一視と共感との関連性を検討した。同一視はフロイト, S. が提唱した精神分析理論における重要概念の一つで、親など重要他者のようになりたいと思い、同じようにふるまったり、その内面を内在化したりすることと定義されることが多い。臨床心理学以外の分野での同一視研究から、共感はこの意味の同一視の背景や基盤にあることが示唆された。しかし、同一視にはこのほかにもさまざまな意味がある。集団状況や退行状態での同一視や乳児の母親への同一視、映画やドラマ、小説等の登場人物への同一視などでは、情動感染や自動的な共感が起こりやすいと考えられる。心理療法における共感にも同一視の過程が含まれていると指摘する理論家もいる。他者の立場に立って気持ちを考える役割取得にも、融合的な同一視過程が含まれている可能性がある。同一視と共感は、おそらく無意識過程で深いつながりを持つことが示唆された。

キーワード：同一視, 共感, 精神分析理論, フロイト, S., 無意識

Key Words : Identification, Empathy, Psychoanalytic Theory, Freud, S., Unconsciousness

同一視 (identification) とは、主体が対象を模倣し、対象と同じように考え、感じ、ふるまうことを通じて、その対象を内在化する過程をいう (福島, 1992)。同一視はフロイトが創始した精神分析理論における重要概念の一つであるが、発達心理学など、臨床心理学以外の分野でも用いられている。本研究では、最初に、同一視に関する精神分析と発達心理学の文献についてレビューするが、同一視に関する文献には共感との関連について言及するものがある。また、共感に関する文献にも、同一視との関連について言及するものがある。本稿の目的は、こうした文献についてのレビューをもとに、同一視と共感との関連について考察することである。

なお、identification は「同一化」と訳されることもあるが、identification は親など自分にとって重要な対象のようになりたいと思うことで、そうした対象と同じになったつもりになるとしても、必ずしも同じになることではない。そのため本稿では、「同じになること」という含意があると思われる「同一化」ではなく、「同一視」を用いることにする。

本稿では、まず初めに精神分析理論における同一視の概念について説明し、次に発達心理学な

* とばり まいね 文教大学生生活科学研究所

ど臨床心理学以外の心理学の分野における同一視の研究について概観する。その次に、共感の概念と研究について概説し、最後に共感と同一視の関連性について考察する。

精神分析理論における同一視の概念

Freud, S. (1921 小此木訳 1970) によると、同一視は、他人に対する感情結合の最も初期の表れであり、幼い男の子が、父親に対して自分も父親と同じにありたいし、そうなりたい、すべての点で父親の代わりになりたいという関心を持つことを指している。一方で、母親に対する依存的対象備給（愛着）が起こり、やがて母親に対して父親の代わりになりたいという願望を持つようになると、父親への同一視は敵意を帯びたものとなるという。これはエディプス・コンプレクスを表している。

Freud, S. (1924 吾郷訳 1970) によると、父親から自分の思い違いを指摘されたり、弟や妹が生まれて母親の愛情を独占できなくなったりすることなどによって、やがて子どもは自分の願望が成就されないことに気づき、そうすると、エディプス・コンプレクスは抑圧されて消滅するという。Freud, S. (1933 道簾訳 2011) によると、こうしてエディプス・コンプレクスを放棄すると、子どもは、前からあった親との同一視を強め、自我の中に、自我に対して道徳的な要求と批判を与える超自我という優越機関¹⁾を形成する。この時期には、子どもにとって両親はすばらしい存在に映っているが、超自我は本来の両親からだんだんと距離を置き、非人称的なものとなり、両親の力は失われていく。そして、教育者、先生、理想の鏡など、両親の代わりとなる人々の影響を受けたりするという。

Freud, S. (1921 小此木訳 1970) は、幼い少女が母親と同じ苦し気な咳に悩むという事例も紹介している。この場合、少女は母親に同一視し、父親に対して母親の代わりになりたいという欲求を表していると考えられる。しかし、Freud, S. (1921 小此木訳 1970) によると、父親や母親といったリビドーの対象以外の他人に対しても、その人との間に何らかの重要な共通点を見つげると、部分的同一視が起こり、新たな絆が生まれることがあるという。秘密の恋人からの手紙を受け取った少女が嫉妬からヒステリー発作を起こしたことを知った女友達が、自分も秘密の恋愛関係を持ちたいと思い、罪意識の中で、その恋愛に付きまとう苦悩をも引き受けて、(同一視の機制から) 同じ発作を起こすという例が示されている。Freud, S. (1921 小此木訳 1970) はさらに、集団の中の個人相互の結合は、重要な感情的共通性があるために、同一視の性質を持つとも指摘している。

Freud, S. (1917 井村訳 1970) は、メランコリー（うつ病）についても、同一視の概念で説明している。愛する人を失うと、人々は悲哀を感じるが、病的な素質のある人の場合には、悲哀の代わりにメランコリーが現れる。メランコリーの精神症状は、深刻な苦痛に満ちた不機嫌、外界に対する興味の放棄と自我感情の低下等を特色としているが、患者の自責の訴えで、患者自身に当てはまるものは少なく、むしろ患者が愛する人やかつて愛した人に当てはまるという印象を受けるといふ。患者は、失った愛の対象に同一視し、愛していた対象に対して持っていた敵意や非難を自分自身に向け、それによって元の対象に復讐しているというのである。

Freud, S. の末娘の Freud, A. は、児童分析を行い、Freud, S. の防衛機制についての理論を発展させたが、同一視についても防衛機制によって説明した。Freud, A. (1937 黒丸・中野訳 1982) によると、ある6歳児は、歯科医で痛い目にあった後に診療所を訪れると、糸製のボールを切り刻んだり、鉛筆を削っては先を折り、削ってはその先を折るというのを繰り返したりと

いうように、あらゆるものに八つ当たりした。この男の子は、体育教師の握りこぶしにぶつかってけがをした次の日には、頭には軍帽、腰にはおもちゃの剣、手にはピストルを持って現れた。子どもは、不安を起こさせる対象のある特徴を取り入れることによって、不安経験を処理している。攻撃者をまねたり、属性を装ったり、攻撃性をまねたりすることによって（攻撃者に同一視することによって）、脅かされる側から、脅かす側へと自分を変えたのである。

同一視の概念は、取り入れ (introjection) や体内化 (incorporation)、投影 (projection) など精神分析における他の概念と関連がある。Knight²⁾ (1940) は、これらの概念について説明している。それによると、取り入れは、対象や対象の部分を主体の自我に無意識的に含めることで、体内化 (外的に存在する対象を飲み込んでしまったという空想：繁樹・四本, 2013) の同義語として用いられる。投影は、主体が自分自身の受け入れられない無意識の傾向を対象に帰属し、それを対象が持っている傾向だと知覚する心理学的節約の方法である。同一視は、取り入れや体内化の同義語として用いられることが多いが、取り入れや投影などさまざまなメカニズムの結果であり、置き換えや代理などその他のメカニズムも働くことがある。Knightによると、同一視に当てはまる状況は3つある。(1) 主体Aは自分自身を対象Bと同一視しているかもしれない。私がある人にあこがれ、その人を真似たいと思うような場合、取り入れが主なメカニズムとなる。対象の属性と基準は私の自我理想の一部となり、私の行動を支配しがちとなる。(2) 主体Aは対象Bを自分自身と同一視しているかもしれない。私の本を読んだり映画を見たりして、物語のある登場人物に同一視する場合、自分自身を彼の立場に置き、受け身的に彼について行き、彼とともに彼の体験を生き、主に自分自身の彼への気持ちを彼に投影し、私が体験している感情を彼が体験していると想像する。(3) 主体Aは対象Bと対象Cを同一視しているかもしれない。この場合は、置き換えや代理のようなメカニズムを含んでおり、「誤同一視」として、前の二つと区別することもできる。

Knightは同一視を取り入れ等の過程によって起こる結果としたが、Schafer³⁾ (1968) は、同一視はそれ自体を過程として見ることができる一連の事象であるとした。同一視は意識的、前意識的部分を含むこともあるが、基本的には無意識過程に基づいている。一度確立された同一視は、般化されたり、刈り込まれたり、詳細が変更されたり、他の同一視と調整されたりすることがあるという。Schafer (1968) は、同一視には、(1) 対象と融合する、(2) 同じになる、(3) 似たようであろうとするの3つの目的をもつものがあり、3つのすべてを含むことが多いと述べている。乳児期の同一視は融合が主な要因となるし、精神病的同一視の場合も、融合と同一性に偏っているが、類似性の達成は、認知的感情的分化に依存しており、ある程度発達してからのみ利用できるという。Schaferによると、同一視は高度な形態の共感にも含まれており、この場合も、同一性や類似性と共に融合が含まれている。主体は、対象とともにいると感じ、対象が感じることを感じるが、自分自身の個性と視点も維持している。融合の形跡が見つからないときの同一視は、意識的、または前意識的コピーか模倣となる。また、Schafer (1968) によると、同一視の対象は、モデルとして取り入れるときに主体にとって重要で、印象的で、感情的に重要な誰かで、その人の一つまたは複数の表象に対して起こり、物の表象に対して起こることもある。そして、主体は同一視の過程を通して、自分の動機と行動パターンと、それらに関する自己表象を、その対象の表象と類似している (または同じか融合している) ように体験するという形に変化させる。長続きする同一視もあるが、同一視の中で具体化される動機づけや行動や表象は変化していき、やがて主体の適応的装備の一部に変化し、それとともに、対象との絆の重要性は減ると述べた。

これまでの大部分の議論では、同一視を、自分にとって重要であこがれの対象である人のようにになりたいと思い、その人と同じようにふるまったり、その人の持っているものを持つようとして、その人の属性や基準、動機などを内在化することと捉えていた。この中で、Knight (1940) が同一視に当てはまるとして示した第1の例のように、他者の内面の内在化を含む同一視と、Freud, A. (1937 黒丸・中野 1982) が言及した攻撃者への同一視のように、他者のようにふるまおうとはしているが、内在化には至っていない同一視を区別することができそうである。

主体 A は主体 B を自分自身と同一視しているという Knight (1940) が示した第2の例には、本や映画の主人公に同一視するという Knight が紹介した例だけでなく、うらやましいと思っている実在の人や自分の子どもなどを自分のように感じ、その人を応援したり、一緒に行動しているつもりになったり、その人の気持ちを想像して一喜一憂したりする場合も当てはまるかもしれない。また、Knight (1940) が示した第3の例は、第1や第2とはかなり異なる使い方だが、実際によくみられることだと考えられる。

Freud, S. は乳児期初期の同一視については、詳細な説明を行わなかったが、その後、精神分析を学んだ人々の中で、乳児期の密接な母子関係や、そうした関係の中での乳児の発達について詳細に検討する人々が現れる。Spitz や Bowlby, Mahler といった人々である (小此木, 1985)。彼らの理論の中では同一視という言葉はあまり使われなかったが、Benedik,⁴⁾ (1959) は乳児期の密接な母子関係について、同一視という言葉を用いて次のように説明している。生まれただばかりの乳児は、自分の外側の世界と自分との境界にはっきりと気づいておらず、乳を与え世話をしてくれる母親に同一視していく。一方で母親も、妊娠、乳汁分泌といった性サイクルの間に自分自身の乳児期を思い出して退行するとともに、母性を発揮するための生理的心的準備を進め、出生して自分の乳首を吸う乳児に共感し、同一視していくというのである。発達早期や退行状態において現れがちなこのような同一視は、Schafer が言及した「相手と融合しようとする」同一視を表しているとも言えるが、「一体感 (他者とあたかも一体であるかのような感覚の体験; 小此木, 2002)」を表しているとも言えるだろう。

精神分析理論には、上に述べたような同一視の概念のほかに、Klein や Kernberg らが言及した投影同一視という概念もある。投影同一視は、「自我の部分を対象の中に押しやり、その対象の内容を引き継ぎ、対象をコントロールしようという意図をもつもので、幻想であるとともに心的操作でもある」と定義されている (中村, 2004)。この概念と共感との関連は非常に少ないと考えられる。本研究ではこの概念については取り扱わないことにする。

精神分析理論における同一視の概念について概説してきたが、臨床心理学以外でも、同一視の概念を扱う研究がある。次節ではそうした研究について概観する。

臨床心理学以外の心理学の分野における同一視の研究

柏木 (1966) によると、Freud, S. を中心とする精神分析的な同一視の概念は、学習心理学や発達心理学の分野でも用いられるようになった。Miller は同一視の概念を用いて模倣学習について検討したが、この動きはその後、模倣についての理解や、模倣学習と同一視概念との統合をはかるという方向に進んだ。Mowrer や Sears は、同一視を、単なる模倣行動としてではなく、発達の視点を持ちつつ、学習理論的に再構成しようとする試みとして発達の同一視理論を発展させた。こうした研究は、さらに Bandura の社会的学習理論に受け継がれていくとされる。

森下 (1996) は、主に発達心理学の分野の同一視研究をもとに、親に対する子どもの同一視を、

「親の行動様式や価値観などを自己に取り入れていく意識的、無意識的過程で、子どもと親との相互作用の中で生じ、同一視の結果として親子間に類似性が生じる」という枠組みで考え、小学生と中学生対象の調査を行った。まず、親密さと同一視欲求を測定するための尺度を作成し、小学3年生を対象に調査を実施したところ、親密さ尺度と同一視欲求尺度の間には強い相関がみられた。また、男女の同一視欲求は異性の親に対してよりも、同性の親に対しての方が強かった。中学生を対象として、親子関係診断尺度への評定と、対人行動に関する20項目への自己評定と、各項目について自分と父親、自分と母親が似ているかどうかの評定を求めた研究では、親が受容的な場合、「思いやり」や「社交性」に関して親との類似性認知が高い傾向がみられた。

荻野（1970）は、子どもの親への同一視を測定する測度として、子どもの自己理想と子どもの認知した親像との対応（assumed ideal similarity）を捉える測度を作成した。この指標を用いて小学校3年生から大学生までの発達の資料を分析したところ、小学5年生が同性の親との同一視得点が最も高かった（松田、1987）。

伊藤（2001）は、青年期女子の性同一性を測定する尺度を作成し、中学1年生から大学生までの701名の女子青年を対象とした調査を行った。その結果、女子青年の性同一性は、父への信頼、母への同一視、ステレオタイプな性役割への同調、性的成熟への戸惑い、性の非受容の5因子から構成されることが明らかとなった。

若原（2003）は、親への態度尺度（愛の次元と力の次元がある）と親への同一視尺度（取り入れの側面とモデルの側面を区別している）（父親用と母親用の2種類）を開発し、大学生男女を対象に調査を行った。それによると、青年は親を愛し親に力を感じている傾向があり、親に愛情と力を感じている青年ほど親を同一視する傾向がみられ、その傾向はモデルの側面で顕著であった。

発達心理学等における同一視研究では、親への同一視を扱うものが多く、同一視の概念を、他者のようになりたいと思い、同じようにふるまったり、その内面を内在化したりすることというように捉えていた。

精神分析理論における同一視の概念と臨床心理学以外の分野での同一視研究について概観してきたが、今度は、本稿のテーマに含まれるもう一方の概念である共感についての理論と研究を紹介する。まず、複雑な歴史を持ち、多様な意味を持つ共感の概念について概説し、次に、1960年代以降に臨床心理学以外の分野において行われた共感研究について概観する。

共感の概念について

共感について最初に学問的な説明を行ったのは、18世紀のイギリスの道徳的哲学者のHumeとSmithである。Hume（1740 土岐訳 1986）とSmith（1759 水田訳 2003）は、つらい感情体験をしている他者に対して気持ちを想像し、同じような気持ちが起こる現象に注目し、これをsympathyと呼んだ。19世紀になると、Darwin（1871 池田・伊谷訳 1967）が動物にもsympathyがみられることを記述した。創成期の心理学や社会学の学者にもsympathy概念について述べる者がいた。社会心理学者のMcDougall（1908）は、sympathyの基本的原初的形態は、他者の中に感情の表出を観察するとき、または観察したために、ともに苦しみ、何らかの感情を体験することで、大部分の人は仲間の感情表出に対してこのような直接的形態のsympathyで反応し続けると述べた。また、社会哲学者のMead（1934）は、人間のsympathyは、他者を助けられているとき、自分の中に、他者の態度を呼び起こす場合に生じると述べ、役割取得の含意を強調

した。その後、主に社会心理学の分野で sympathy 概念を用いた研究が行われた (Heider, 1958 大橋訳 1978 など)。

ただし、現在、共感を表す英語としては empathy を用いるのが一般的である。empathy の直接の語源はドイツ語の Einfühlung である。Einfühlung は、19 世紀後半のドイツで当初は「内的模倣により、知覚する形の中に入り込み感じ取る」というような意味で、美的認識を把握する方法として、何人かの美学者によって用いられた (Gladstein, 1984)。哲学者、美学者で心理学者でもあった Lipps は、この用語を他者の内面をどのように把握するかということの説明にも用いるようになった。Einfühlung は「感情移入」と訳されることが多い。Lipps は『心理学原論』(1909 大脇訳 1934) の中で、「感情移入は認識の源泉の一つで、ある対象を統覚する際に、自分の内部的行動の一定の仕方の表象が呼び起こされ、それをその対象に属するものとして体験するとともに、対象の中でそれが一緒に関与しているように思うことである」と説明した。

イギリスに生まれ、Wundt の下で学び、アメリカの大学で教鞭をとった Titchener は 1909 年、この Einfühlung という言葉を empathy と訳してアメリカの心理学界に伝えた。『A Beginner's Psychology』(Titchener, 1922) では、empathy は「ショッキングな事故の話を知ると、息を呑み、身をすくめ、想像して吐き気を感じる、というように状況の中に自分自身がいると感じる傾向」であると説明された。

Freud, S. も『集団心理学と自我の分析』(1921 小此木訳 1970) の中で、同一視の説明をした後で、他者の中の自我に縁遠いものを理解するのに大きな役割を果たすものとして、Einfühlung に言及し、さらに (脚注で)、「同一視からは模倣を経て Einfühlung、つまり他者の心的生活に対してある態度を取ることができるようにするメカニズムに道が繋がっている」と述べた。

Gladstein (1983, 1984) によると、Reik, Stewart, Sullivan, Kohut らの精神分析家や心理療法家が、Freud, S. の同一視と共感についての短い言及を敷衍して、共感についての理論を展開させた。Reik (1949) は心理療法における共感の 4 つの局面について、次のように記述した。(1) 同一視：他者に注意を払い、その人の瞑想に没頭する、(2) 体内化：他者を内在化することによって、他者の体験を自分自身のものとする、(3) 反響 (reverberation)：他者の体験を体験しながら、同時に認知的感情的にそれと関連する自分自身のことに気持ちを注ぐ、(4) 分離 (detachment)：内的に融合した関係から別々のアイデンティティという立場に戻り、理解と他者からの分離を反映する反応ができるようにする。Stewart (1956) は、「empathy は他者との意図的同一視で、人は empathy によって、善意をもって、自分とは異質な他者を理解しようと努力する」と述べた。Stewart (1956) は、生の (raw; 無意識的) 同一視、意図的同一視、抵抗、意図的再同一視を、共感の 4 段階として示した。Reik (1949) と Stewart (1956) は心理療法における共感の過程について述べ、その中に「他者に注意を払い、その人の内面を理解しようとする」という意味での同一視の過程がある」と述べたことになる。

Sullivan (1953 中井・宮崎・高木・鑑訳 1990) は、「母親が不安による緊張を感じると、それが乳児に伝わり、乳児は不安を感じる」というような対人間の過程のことを empathy と呼んだ。Sullivan はこうした独特の見方がどこから生まれたのか明確に説明していないが、Gladstein (1984) は、それは臨床経験から得られたものであるとともに、彼は Freud, S. の集団における共感についての議論を知っていたらと論じている。

このように、empathy 概念は臨床心理学の分野で広く用いられるようになったが、empathy

概念について深く考察し、最も大きな影響を与えたのは、クライアント中心療法を提唱した Rogers である。Rogers (1975) は、「共感的に共にいる」というのは、「他者の内的照合枠と気持ちの内容とその意味を、まるでその人であるかのように正確に感じ取ることで、しかも「あなたかも」という条件を失わないようにすることだ」と述べた。またそれは、「他者の私的世界に入り、判断をすることなく自由に動き回って、刻々と変化するこの人の中の感情の流れや、その人がほとんど気づいていないような意味を感じ取り、自分が感じ取ったことを伝え、それへの反応から、正確に理解できているかチェックすることだ」とも述べた。

精神分析家の Kohut も、共感 (empathy) を重視し、治療論の中に組み込んで、共感の意味と機能を理論的に探究した (安村, 2016)。Kohut は empathy を代理の内省、精神分析的なデータ収集のための方法と定義した。

前にも述べたように、社会心理学など臨床心理学以外の心理学の分野では、1950年代まで empathy ではなく sympathy の用語が用いられることが多かったが、1960年代以降、社会心理学などでも empathy という用語を用いることが多くなる。Rogers の活躍などによる影響があったのかもしれない。次節では、1960年代以降の臨床心理学以外の心理学の分野において行われた共感研究について概観する。

1960年代以降に行われた臨床心理学以外の共感研究

社会心理学の分野では、1960年代以降、実験場面などで共感を引き起こし、それを測定する研究や、パーソナリティ特性としての共感 (共感性) を測定する尺度の作成等の研究が行われるようになったが、共感を表す用語として empathy が用いられるようになった。

社会心理学者の Stotland (1969) は、empathy を「他者が感情を体験している、あるいは体験しようとしているのを見た観察者が、そのために感情的に反応することで、他者と観察者の感情は少なくともきわめて類似している」と定義し、実験場面で苦痛や快感を表している人物を見せ、観察者の生理的反応を測定する研究を行った。発達心理学者の Feshbach と Roe (1968) は、empathy を「代理的感情反応」と定義し、6-7歳の児童に、登場人物が感情を体験している場面のスライドを見せ、自分がどう感じたかと登場人物がどう感じたかを答えさせ、児童が登場人物と同じ感情を感じた場合に、共感得点を与えるという研究を行った。ここでは、共感において、自分と相手の感情が一致することを重視している。また、Mehrabian と Epstein (1972) は、empathy を「知覚した他者の感情体験に対する代理的感情反応」と定義し、共感の感情的側面に注目する情動的共感性尺度を作成した (日本語版は加藤・高木, 1980)。

Stotland (1969) や Feshbach と Roe (1968) や Mehrabian と Epstein (1972) らの empathy の定義は、「他者の感情体験を見た観察者に起こる感情反応」という内容であり、どちらかという Lipps や Titchener の empathy 概念や臨床心理学における empathy 概念よりも、Hume や Smith, McDougall らの sympathy 概念と類似している。つまり、empathy の概念は sympathy の含意も受け継ぎ、より多義の概念となった。

Gladstein (1983) は、美学的ルーツを持ち、主に臨床心理学の分野で用いられてきた empathy 概念を用いた研究と、社会心理学や発達心理学における共感研究 (sympathy の用語が用いられた研究を含む) についてレビューし、共感研究は、情動感染や感情反応を強調したものと、役割取得や認知的共感を強調したものの二つに大別されると述べた。Feshbach や Hoffman, Davis など現在の主な共感理論家たちも、共感には感情的要素と認知的要素がある、感情的共感

と認知的共感があるという類似した主張をしている。共感の認知的要素には、他者の感情の手がかりの認知や視点取得、役割取得、他者の感情理解等が含まれる。共感の感情的要素には、相手と同じ、または同様の感情を感じることに、相手の状況にふさわしい感情を感じることや他者指向的共感（苦しんでいる相手に同情や心配、何かしてあげたい等とすることなど）が含まれる。相手と同じ感情を感じるのには、情動感染（情動が周囲の人に自動的に伝わること）の場合もあるし、相手の気持ちを想像し、相手に寄り添って気持ちを共有する場合もある。情動感染の場合は、発達初期のプリミティブな共感として、共感の概念に含める場合（Hoffman, 2000 菊池・二宮 2001 など）と、共感の概念に含めない場合がある。感情的共感を自己中心的共感または個人的苦痛（personal distress）と他者指向的共感または共感的関心⁵⁾（empathic concern）の二つに区別する場合もある。個人的苦痛は、他者の苦痛に対して、自分が苦しくなり、自分の苦痛を軽減するためにその場を離れたと思うような自己中心的反応をする傾向をいう。Davis（1983, 1994 菊池 1999）が開発した共感的関心と個人的苦痛、視点取得、ファンタジーの4下位尺度からなる対人的反応性指標（IRI）という特性共感の尺度は、世界中で広く用いられている。ファンタジー尺度は、映画や本の登場人物など架空の他者に感情移入する傾向を測定する尺度である。登張（2003）なども類似した尺度を作成している。

Batson, O'Quin, Fultz, Vanderplas, と Isen（1983）は、大学生に苦しんでいる他者の映像を、苦痛を見続けなければならない（逃げるのが難しい）条件と、短時間で見るのをやめてもよい（容易に逃げられる）条件のどちらかで見せ、それへの感情反応を、形容詞チェックリスト（共感的反応と苦痛反応を示す形容詞群からなる）で評定させるとともに、他者への援助を申し出るかどうか尋ねるといった実験的研究を行った。それによると、苦痛反応よりも共感的反応が優勢だった協力者は、容易に逃げられる条件でも、援助を申し出る者が多かった。

登張（2005）は、Feshbach と Roe（1968）や Batson 他（1983）の共感測定法を参考にして、女子大学生と大学院生を対象に、苦しんでいる中学生のビデオ映像を見せ、それへの反応を質問紙尺度で測定する研究を行った。質問紙への回答をもとに、並行的感情反応（相手と同じ感情を感じることに）、他者指向的反応、不快反応、役割取得、自動的共感の5尺度が作成された。また、心理的重なり尺度（二つの円が離れているものと接しているもの、重なる部分が徐々に大きくなり、ほとんど重なっているものまでの8つの図形からなる。Aron, Aron と Smollan（1992）の Inclusion of Other in the Self Scale を改変した）でビデオの主人公との気持ちの重なりを最もよく表す図を選択させ、上記の5尺度との関係を検討した。それによると、不快反応以外の4尺度の得点は、心理的重なりがない群（二つの円が接している図形を選んだ者を含む）よりも心理的重なりがある群の方が高かった。

2000年以降には、共感が起こるとき、脳のどの部位が活性化するかを検討する神経科学的研究が盛んに行われるようになった。最初は痛みへの共感についての研究が多かったが、社会心理学等の分野で対象とされるような心理的苦痛や悲しみへの共感等を扱う研究も増えてきた。神経科学的な共感研究の分野では、共感（empathy）には、(1) 他者の感情と一致する感情を感じることに（感情の共有）、(2) 他者の感情や心的状態が分かること（感情の理解）、(3) 他者に対する気遣い（向社会的関心）という3つの要素が含まれるとされる場合が多い（Decety & Svetlova, 2012；Zaki & Ochsner, 2012；登張, 2014）。empathy 概念についてのこの説明を、上記の共感の感情的要素と認知的要素についての議論に当てはめると、(1) と (3) は共感の感情的要素、(2) 共感の認知的要素に分類できる。ただし、(3) はむしろ sympathy を表しているとして empathy

の概念から省かれる場合もある（登張，2014）（脚注5）参照）。

また、最近の共感研究の一つの動向として、動物の共感に注目する動きもある。動物の共感や向社会的行動についての研究を行っている de Waal（2009 柴田・西田訳 2010）によると、動物、特に哺乳類の多くの動物が仲間に対して（時には仲間以外にも）共感や向社会的行動を示すことが分かっている。動物の共感研究は行動観察によって行われることが多いので、どのような共感が起こっているのか十分明確になっていないが、他者に対する気遣いもよくみられるし、視点取得能力を示す種もいるという。共感能力には進化的基盤もあることが示唆されている。

さまざまな共感研究について概説してきたが、次の節では、これまでの研究からの知見と、それについての議論をもとに、同一視と共感との関連性について検討したい。

同一視と共感との関連性

同一視は、親など自分にとって重要な他者のようになりたいと思い、他者のようにふるまったり、他者（の一部）を内在化したりすることと定義されることが多い。発達心理学など臨床心理学以外の分野で行われた同一視に関する研究では、同一視をこのように捉え、親の同一視を扱うものが多かった。これらの研究で、共感について直接言及するものはなかったが、親が受容的な場合や家族への愛情や尊敬がある場合に同一視が起こりやすいことを示唆するものはあった。親の受容は子どもへの共感を表していると考えられるし、家族への愛情や尊敬の背景に共感があるとも考えられる。他者のようになりたいと思い、他者の内面を内在化しようとする同一視は、尊敬できるような特徴を持つとともに共感し受容してくれるような他者に対して起こりやすいのかもしれない。これらの研究からは、共感とは、こうした同一視の背景や基盤となることが示唆された。

なお、上記の同一視と類似して、他者のようになりたいと思い、同じようにふるまおうとするが、他者の内在化には至らない同一視もある。Freud, A. が述べた攻撃者への同一視もその一例だが、これは幼似的な同一視と言えるかもしれない。このような同一視と共感との関係は不明である。Knight（1940）は同一視の第3の形態として、主体Aが対象Bを対象Cと同一視（誤同一視）する例も挙げている。この形態の同一視と共感との関連は少ないと考えられる。

しかし、同一視にはこのほかにもさまざまな意味がある。他者との間に何らかの共通点を見つけると、自分がその人ようになった気になるというような現象も同一視と捉えることができるし、映画やドラマ、小説などの登場人物への同一視もある。発達初期や退行状態における同一視のように、他者と融合し一体化するような同一視もあると考えられている。集団状況でも同様の同一視が起こりやすいようである。こうした融合的な同一視が起きている場合には、情動感染ないし自動的な共感が起きやすいのかもしれない。Sullivan の「母親が不安による緊張を感じると、それが乳児に伝わり、乳児は不安を感じる」という現象としての共感とは、融合的同一視と情動感染を表していると言えそうである。

Freud, S.（1921 小此木訳 1970）は、同一視は他人に対する感情結合の最も初期の表れだとも述べた。他人に対する感情結合というのは、共感を表しているとも考えることもできる。上に、情動感染は融合的同一視の状況で起こりやすいのではないかと述べたが、Schafer（1968）は、高度な形態の共感にも、融合的同一視を含めた同一視が含まれていると述べている。Schafer（1968）は、高度な形態の共感では、主体は自分自身の個性と視点も維持したまま、対象とともにいると感じ、対象が感じることを感じるとしたが、このとき、主体には同一視の過程が起こっ

ているということになる。プリミティブな共感でも高度な形態の共感でも、共感が起きている場合には、何らかのレベルの同一視が無意識的に起きていることが多いのかもしれない。登張(2005)のビデオ刺激を用いて共感を喚起し、質問紙尺度で共感的反応を測定した研究で用いられた心理的重なり尺度は、融合的同一視を測定しているとも考えられる。この研究では、融合的同一視をしていた群はしなかった群より、自動的共感と役割取得、並行的感情反応、他者指向的反応の得点が高かった。同一視が起きている場合には、共感のさまざまな過程やさまざまな感情反応が起こりやすいと考えられる。

上に述べたように、Reik や Stewart らの精神分析家は、Freud, S. (1921 小此木訳 1970) の「同一視から模倣を経て、他者の内面理解に大きな役割を果たすものとしての Einfühlung (empathy) に道が繋がっている」という議論を敷衍させて、同一視の概念を含めた心理療法における共感過程の説明を行った。Reik (1949) は心理療法における共感の過程の一つとして同一視を位置づけたし、Stewart (1956) は empathy を意図的同一視であると述べた。心理療法における共感とは、患者の気持ちの理解や苦しみの寛解などをめざしている。そうした共感にも、少し距離を置く過程や認知的意図的過程とともに同一視の過程が含まれていることが示唆された。

Rogers (1975) は、共感において、他者の内的照合枠と気持ちの内容とその意味を、まるでその人であるかのように正確に感じ取ることと、「あたかも」という条件を失わないようにすることが重要だと述べた。つまり、視点取得と役割取得を重視したが、そのために、他者の私的世界に入り、判断することなく自由に動き回って、この人の感情の流れやその意味を感じ取るのだと述べた。この説明は、Reik の同一視過程の説明(他者に注意を払い、その瞑想に没頭すること)と類似している。共感における視点取得や役割取得において、自分を失わないある種の同一視の過程が重要であると主張されているとも考えられる。他者の立場に立って気持ちを想像する認知的な役割取得にも同一視過程が潜在的に含まれていることが示唆された。

同一視と共感についての文献をレビューし、同一視と共感との関連性について検討してきたが、これまでの議論から、総じて、同一視と共感との間には深いつながりがあることが示唆された。おそらくそれは無意識過程におけるつながりなので、意識するのが難しく、研究も困難だが、非言語的測度を用いた登張(2005)では、同一視と共感との強い関連が示唆された。同一視と共感との関連性については、たとえばこうした方法を用いて、今後さらに検討する必要があると考えられる。

引用文献

- Aron, A., Aron, E. N., & Smollan, D. (1992). Inclusion of Other in the Self Scale and the Structure of Interpersonal Closeness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 596-612.
- Batson, C. D., O'Quin, K., Fultz, J., Vanderplas, M., & Isen, A. M. (1983). Influence of Self-Reported Distress and Empathy on Egoistic Versus Altruistic Motivation to Help. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 706-718.
- Benedik, T. (1959). Parenthood as a developmental phase. *Journal of American Psychoanalytic Association*, 7, 389-417.
- Darwin, C. R. (1871). *Decent of Man, and Selection in Relation to Sex*. London: Joh Murray. (ダーウィン, C. R. 池田次郎・伊谷純一郎(訳)(1967) 人類の起源 今西錦司責任編集 世界の名著 39 東京: 中央公論社)
- Davis, M. H. (1983). Measuring Individual Differences in Empathy: Evidence for a Multidimensional Approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.

- Davis, M. H. (1994). *Empathy: A Social and Psychological Approach*. Madison, WI: Brown & Bechmark. (デイヴィス, M. H. 菊池章夫訳 (1999). 共感の社会心理学 東京: 川島書店)
- Decety, J. & Svetlova, M. (2012). Putting together phylogenetic and ontogenetic perspectives on empathy. *Developmental Cognitive Psychology*, 2, 1-24.
- de Waal, F. (2009) *The Age of Empathy: Nature's Lessons for a Kinder Society*. New York: Harmony Books. (ドゥ・ヴァール, F. 柴田裕之・西田利貞 (訳) (2010). 共感の時代へ—動物行動学が教えてくれること— 東京: 紀伊国屋書店)
- Feshbach, N. D. & Roe, K. (1968). Empathy in Six- and Seven-years-olds. *Child Development*, 39, 133-145.
- Freud, A. (1937). Identification with the Aggressor. (In: *The Ego and Mechanisms of Defense*. London: Hogarth Press, pp.109-121.) In G. H. Pollock (Ed.) *Pivotal Papers on Identification*. Madison Connecticut: International Universities Press, Inc. pp.105-114. (フロイト, A. 黒丸正四郎・中野良平訳 (1982). 攻撃者との同一視 牧田清志・黒丸正四郎 (監修) アンナ・フロイト著作集2 自我と防衛機制 東京: 岩崎学術出版社 pp.87-97.)
- Freud, S. (1917). Mourning and Melancholia. (*Standard Edition*, 14, 237-258, London: Hogarth Press, 1957) In G. H. Pollock (Ed.) *Pivotal Papers on Identification*. Madison Connecticut: International Universities Press, Inc. pp.21-39. (フロイト, S. 井村恒郎 (訳) (1970). 悲哀とメランコリー フロイト著作集6 京都: 人文書院 pp.137-149.)
- Freud, S. (1921). Identification. (In: Group Psychology and Analysis of the Ego. *Standard Edition*, 18, 105-110. London: Hogarth Press, 1961) In G. H. Pollock (Ed.) *Pivotal Papers on Identification*. Madison Connecticut: International Universities Press, Inc. pp.41-46. (フロイト S. 小此木啓吾 (訳) (1970). 集団心理学と自我の分析 VII 同一視 フロイト著作集6 京都: 人文書院 pp.222-226.)
- Freud, S. (1924). Der Untergang des Ödipuskomplexes.⁶⁾ (The Passing of Oedipus-complex. *Collected Papers*, 2, 269-276. London Hogarth Press, 1948) (フロイト, S. 吾郷晋浩 (訳) 1970 エディプス・コンプレックスの消滅 フロイト著作集6 京都: 人文書院 pp.310-315.)
- Freud, S. (1933). Excerpt from Lecture XXXI: The Dissection of the Psychical Personality. (*Standard Edition*, 22, 62-67. London: Hogarth Press, 1964) In G. H. Pollock (Ed.) *Pivotal Papers on Identification*. Madison Connecticut: International Universities Press, Inc. pp.47-52. (フロイト, S. 道簇泰三 (訳) (2011) 続精神分析入門講義 第31講 心的パーソナリティの分割 フロイト全集21 東京: 岩波書店 pp.74-104.)
- 福島京子 (1992). 同一視 (同一化) 氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕編 心理臨床大事典 東京: 培風館 pp.1059-1060.
- Gladstein, G. A. (1983). Understanding Empathy: Integrating Counseling, Developmental, and Social Psychology Perspectives. *Journal of Counselling Psychology*, 30, 467-482.
- Gladstein, G. A. (1984). The Historical Roots of Contemporary Empathy Research. *Journal of History of the Behavioral Sciences*, 20, 38-59.
- Heider, F. (1958). *The psychology of Interpersonal relations*. New York: John Wiley & Sons, Inc. (ハイダー, F. 大橋正夫 (訳) (1978) 対人関係の心理学 東京: 誠信書房)
- Hoffman, M. L. (2000) *Empathy and Moral Development: Implications for Caring and Justice*. Cambridge University Press. (ホフマン, M. L. 菊池章夫・二宮克美 (訳) (2001). 共感と道徳性の発達心理学 思いやりとの正義とのかかわりで 東京: 川島書店)
- Hume, D. (1740) *Treatise of Human Nature*. London: Longman. (ヒューム, D. 土岐邦夫 (訳) (1968). 人生論 大槻春彦 (編集) 世界の名著27 ロック・ヒューム 東京: 中央公論社 pp.407-532.)
- 伊藤裕子 (2001). 青年期女子の性同一性の発達—自尊感情, 身体満足度との関係から— 教育心理学研究, 49, 458-467.
- 柏木恵子 (1966). 同一視に関する最近の研究 教育心理学研究, 16, 230-245.
- 加藤隆勝・高木秀明 (1980). 青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究, 2, 33-42.
- Knight, R. P. (1940). Introjection, Projection, and Identification. (*Psychoanalytic Quarterly*, 9, 334-341.) In Pollock, G. H. (Ed.) *Pivotal Papers on Identification*. Madison Connecticut: International Universities press, Inc. pp.115-121.

- Lipps, T. (1909). *Leitfaden der Psychologie, Dritte, Teilweis, Ungealterte Auflage.*⁷⁾ Leipzig: Verlag von Wilhelm Engelmann. (リップス, T. 大脇儀一 (訳) (1934). 心理学原論 東京: 岩波書店)
- 松田惺 (1987). 子どもの親同一視の測定に関する方法論的研究 教育心理学年報第 26 集 pp.176-177.
- McDougall, W. (1908). *An Introduction to Social Psychology.* London: Methuen & Co Ltd.
- Mead, G. H. (1934). *Mind, Self, & Society.* Chicago & London: The University of Chicago Press.
- Mehrabian, A. & Epstein, N. (1972). A Measure of Emotional Empathy. *Journal of Personality, 40,* 525-543.
- 森下正康 (1996). 子どもの社会的行動の形成に関する研究 東京: 風間書房
- 中村俊哉 (2004). 投影同一化 (投影同一視) 氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康弘 (編) 心理臨床大事典改訂版 東京: 培風館 pp.1057-1058.
- 荻野惺 (1970). 同一視の指標化に関する一検討 名城大学教職課程部紀要, 3, 53-68.
- 小此木啓吾 (1985). 現代精神分析の基礎理論 東京: 弘文堂
- 小此木啓吾 (編) (2002). 一体感 精神分析事典 東京: 岩崎学術出版社 p.26.
- Reik, T. (1949). *Listening with the Third Ear : The Inner Experience of the Psychoanalyst.* New York: Grove.
- Rogers, C. R. (1975). Empathic: Unappreciated Way of Being. *Counseling Psychologist, 5,* 2-10.
- Schafer, R. (1968). Identification: A Comprehensive and Flexible Definition. (In: *Aspects of Internalization.* New York: International University Press, pp.140-180) In Pollock, G. H. (Ed.) *Pivotal Papers on Identification.* Madison Connecticut: International Universities press, Inc. pp.305-345.
- 繁榊算男・四本裕子 (監訳) 原著監修 G. R. ファンデンボス (2013). 体内化 APA 心理学大辞典 東京: 培風館 p.561.
- Smith, A. (1759). *The Theory of Moral Sentiments.* Oxford, England: Clarendon Press. (スミス, A. 水田洋 (訳) (2003). 道徳的感情論 東京: 岩波書店)
- Stewart, D. (1956). *Preface to empathy.* New York : Philosophical Library.
- Stotland, E. (1969). Exploratory Investigations of Empathy. In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in Experimental Social Psychology, Vol.4.* New York: Academic Press. Pp.271-314.
- Sullivan, H. S. (1953). *The Interpersonal Theory of Psychiatry.* New York: Norton & Company. (中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鏑幹一郎 (共訳) (1990). 精神医学は対人関係論である 東京: みすず書房)
- Titchener, E. B. (1922). *A Beginner's Psychology.* New York: Macmillan Company.
- 登張真稲 (2003). 青年期の共感性の発達: 多次元的視点による検討 発達心理学研究, 14, 136-148.
- 登張真稲 (2005). 共感喚起過程と感情的結果, 特性共感の関係—性の類似度, 心理的重なりの効果 パーソナリティ研究, 13, 143-155.
- 登張真稲 (2014). 共感のイメージング研究から分かること 発達心理学研究, 25, 412-421.
- 若原まどか (2003). 青年が認識する親への愛情や尊敬と, 同一視および充実感との関連 発達心理学研究, 14, 39-50.
- 安村直己 (2016). 共感と自己愛の心理臨床 大阪: 創元社
- Zaki, J., & Ochsner, K. (2012). The Neuroscience of Empathy: Progress, Pitfalls and Promise. *Nature Neuroscience, 15,* 675-680.

脚注

- 1) 優越機関 道旗訳『続・精神分析入門講義』では「優越的審級」と訳されているが、英語版では superior agency となっている。
- 2) Robert Palmer Knight (1902-1966) アメリカの精神分析医。オースティン・リグス・センターの医学主任を勤めた。Contributors. In Pollock, G. H. (Ed.) *Pivotal Papers on Identification.* Madison Connecticut: International Universities press, Inc. p.x.
- 3) Roy Schafer (1922-2018) アメリカの心理学者, 精神分析家。コーネルが医学医学部教授, コロンビア大学精神分析訓練研究センターの訓練監督分析家等を勤めた。https://en.wikipedia.org/wiki/Roy_Schafer.
- 4) Therese Benedek (1892-1977) ハンガリー生まれのユダヤ系の精神分析家, 研究・教育者。ブタペスト大学

では児童心理学を学んだが、精神分析に転向した。夫と共にハンガリーの「政変を避けてドイツに行き、さらにナチスから逃れるためにアメリカに渡り、1936年から1969年までシカゴ精神分析協会で教員とスタッフ・メンバーを勤めた。https://en.wikipedia.org/wiki/Threse_Benedek。

- 5) 共感的関心を sympathy と表記する研究者もいる (Eisenberg など)。共感概念を表す用語として、empathy に地位を譲った sympathy は、現在では共感的関心の意味で用いられることが多い。
- 6) ドイツ語の原書は出版社不明。
- 7) Leitfaden der Psychologie 第3版 (第1版は1903)。

